日本語言語文化における主体性の研究

—他動詞再帰構文を中心に—

稲村 すみ代

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of Subjectivity in Japanese Language Culture

INAMURA Sumiyo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The purpose of this study is to analyze subjectivity in Japanese language culture and to propose better explanations of Japanese syntax for Teaching Japanese as a Second Language programs. One of the characteristics discussed in this essay is that in Japanese, predicate describes a certain phenomenon, and both the speaker of the statement and the phenomenon itself are the subjects of the statement.

1.はじめに

本論は日本語の特性につき、「主体」「自他」などをキーワードとして考察する。話し手（表出の主体）による表現が、聞き手に受け取られるとき、聞き手はどのような受容を行っているのか、話し手は聞き手のどのような受容を前提として発話しているのか。すなわち、日本語表現が機能する「場」が、いかなる受容を要するかを考察していくための第一歩として日本語表現の中の自他表現について記述しようとするものである。

日本語は「発話状況・発話の場」を重視し、「発話主体中心の視点を通じた表現」による言語であるという点を前提として考察をすすめ、日本語教育現場でどのように指導教育していく必要があるのかをさぐる。日本語言語文化における日本的思考法、表現法を考察することを最終的な目的として、その第一段階として、本稿では日本語の文の主体と他動性、他動詞文、自動詞文について述べたい。新しい言語観、日本語観に基づきつつ、日本語教育現場で、学習者の理解に役立つ具体的な文法記述がどのように可能となるかとさぐっていくことを目標としていきたい。以下の3点を中心に考察を進めていくつもりであるが、本稿は特に（3）の他動詞文を中心

に記述する。

（1）「発話の表現主体と文構造の主体」の関係からみた日本語の構造と日本語の発想

（2）「場＝発話の表現主体と聞き手の共通理解空間」の形成

（3）「自動詞・他動詞」の表現、受動能動の表現、授受動詞など、個々の文法現象に関わる日本語の構造と表現に含まれる意識

日本語の他動詞文とは、「動作主体（agent）が意志主体性をもって他者に行為を及ぼす」という西欧語における他動詞文とは異なり、自動詞文から連続して「事象の推移」を描写する表現であることを述べていく。

2.日本語教育の視点から

筆者は、日本語を母語としない学習者に日本語と日本文化を教える、という仕事を1988年より20年続けてきた。日本語を母語としない学習者の誤用文などを通じて、日本語の特質について考えさせられることが多く、専門としてきた日本語統語論に関し、語用論も含めた、表出されたコミュニケーション上の日本語を通して、日本語と日本文化について学習者の理解を深めるという視点で考えるようになって

た。

第二言語としての日本語教育の歴史は古く、先人は効果的な日本語教育の方法を求めて教育面、言語学研究の面でさまざまな努力を重ねてきた。しかし、日本語学習者の多くが「順調に日本語の学習を続けてきて、高度な文法項目も習得し語彙力も高まったのに、理解できない文章が増えていく一方であり、自分にはこれ以上の日本語習得は無理ではないかと思う」という壁に直面する。

インドネシアや中国での日本語教育経験を持つ森田良行(1998)は、「外国人に対する日本語教育でも、はじめはとにかく正しい日本語を身につけさせ、やがて上手な日本語、うまい優れた日本語の習得へと進み、ついには味のある日本語らしい日本語が使えるよう目指す。」と述べている(227)。

この森田の発言によっても、日本語教育に携わってきた日本語研究者自身が「最初に教える正しい日本語」を習得した学習者が、「日本語らしい日本語が使えるようになる」までかなりの距離があると、感じていることがわかる。

日本語学習者にとって「日本語らしい日本語」の習得が遠い存在であってよいわけではない。日本語研究者が「日本語らしい日本語」とはどのようなものであると考えているのかについて明らかにしていくべきであり、日本語教育に携わっている者は日本語学習者のとまどいや誤解を受け止めることを第一歩として、自覚的に日本語言語文化に向かっていく必要がある。日本語の内包することがらを分析し、日本語教育の指導に反映させていかなければならない。

3.日本語の主体

「日本語は、状況を把握し、話者と聞き手の関わりを考慮しないと理解できない」とは、日本語学習者が、ある程度日本語学習が進んだ段階で言う言葉である。非日本語母語話者にとって「日本語の文の意味がつかみにくい」という状況が起こるとき、何が非母語話者の理解を阻んでいるのか、何を補ってやれば、日本語を日本語の論理によって理解しているのか、ということは、日本語教育の現場に対して、理論として十分に提出されているとはいえない。

本稿においては、日本語の主体の問題、述語表現、題述関係などを俯瞰し、「グローバルな文化の中での日本語」という観点から、日本語言語文化を考察していきたい。

本稿で主体というのは、「述部(属性、様態、状態、変化移動など)が実現する場として形成されている一定の範囲」という意味での、「predicate が実現する場」をさす。また、その predicate を実現して、現実に発話(表現)している主体を「表現主体」と呼ぶ。

竹林(2004)に定義されている「主部」という呼び方についてだが、現在の日本語教育の場で「主部」という言い方を用いた場合、橋本文法などにいう「修飾語＋主語」を主部と呼んでいることとの区別がむずかしいことを考慮して、現段階では使用しない。また、predicate という用語を使うのに subject という語を、筆者が教育現場で避けているのは、英文法などで SVO、SVC などと言う場合の「S」との同一視を学習者から遠ざけるためである。あえて「主語」という語を用いる場合には、日本語の主語と英語などの主語は異なっていることに留意させている。

「花が咲いた」という表現において、述語「咲いた」という事態は「花」という主体において実現している。「文の主体」また、「花が咲いた」と認識し、表現している主体もある。「発話主体・表現主体」

こうした「文の主体」＝「文の述語事態の実現している場は何か」と、「発話主体」

＝「誰が文の表出視点の中心なのか」、「誰が発話しているのか」というふたつの主体は、同一の場合もあり、異なる場合もある。発話主体や文の主体は表出の場のなかに融合的に存在する。

この融合された表出の場に、母語話者は、無意識に入り込んでおり、発話はそのままだ理解できる。では、表現主体(発話者・作者)が、聞き手・読者を誘い込もうとしている「共通の場」はどのように準備され、どのように表出されているのか、それを聞き手・読者はどのように受け取るのか。母語話者が無意識に行っている受容を、非母語話者に伝えるには、何を理解させていけばいいのか。日本語言語文化

の基層として存在する日本語構文の問題について、基本となる表現形式を検討するところから考察を始めたい。

日本語言語表現は、話し手・聞き手の間に、互いを「コミュニケーションの場にいる者同士」と認識するところから始まる。どうしたら「共通理解の場」が、話し手聞き手の間にできあがるのか。非日本語母語話者が、「共通理解の言語空間」をどのように構築していくのか。この「コミュニケーション成立のための情報」が不足している「非日本語母語話者」は、「単語はすべて知っている語であり、文法もわかっているのに、文の意味がわからない」あるいは、「日本語の文法規則にのっとって正しい文を表出したと思うのにもかかわらず、この文は日本語では言わないと、指摘されてしまう」ということを経験する。日本語教育者は、この問題に対処していかねばならないと思うのである。

日本語の統語問題の主な事項のうち、「主語・述語」、「自動詞文・他動詞文」、「助詞ハ」について、近年、大きな研究成果があがっているが、以下の点も省みていかなければならない。

- 1) 日本語教育テキストなどへの文法記述がまだ十分とはいえない。
- 2) 日本語教師による授業で、最新の文法記述を生かした指導が成功していない場合も多い。
- 3) 学習者の母語干渉の強弱が、母語ごとにどのように学習困難点をもたらすのかについて、研究はまだ不十分である。

これまで追求が十分でなかった「主体」をめぐる日本語統語論（シンタクス）と日本語表現の関係をみていき、どのような解釈を伝えれば、非日本語母語話者の日本語理解が適切に進められるのか、考察していきたい。

日本語の「主体」のとらえ方、「自他」「陳述」など、学習者にとって「理解習得がむずかしい」という項目、誤用が多い項目について、考察していくつもりであるが、そのための第一考察として、本稿では、日本語の他動詞文の分析を述べたい。

4. 日本語の他動詞文

日本語の「自他」の認識の表出は平安時代に始ま

り、江戸国学者の富士谷成章や本居宣長、本居春庭らの研究によって進展を見た。特に本居春庭は「未然・連用・終止・連体・已然・命令」の六つの活用形について研究を深め、「命令形」を他の活用と別扱いしていることで、「ディクテム（事実）」と「ムード（陳述）」を区別し、日本語動詞に深い考察を展開している。

日本語の「自・他」の表現の考察は、日本語言語文化における「他者性」「主体性」の問題と深く関わっている。日本語言語文化における「主体」の問題の第一歩として、日本語という言語そのものが表出する「自・他」の表現を追求することが必要となる。

日本語の特徴を知るために、非日本語母語話者による誤用研究はひとつの視点を与える。日本語教育に関して行われたこれまでの研究では、一例をあげるなら、小林典子（1996）は、自動詞と他動詞の使い分けのテストを行い、インドヨーロッパ語（以下「印欧語」と略記）系統の母語話者は他動詞文を主として使い、日本語母語話者が自動詞文で表現する文でも、他動詞を用いることが多いと報告している。この報告は、筆者が20年間収集した作文誤用例の分析とも一致している。

竹林（2008）は、白川（2002）の中にある中国語母語話者の誤用例を紹介している。きつく締められていた瓶の蓋に力をいれ、ようやく蓋が開いたとき、学習者が「あ、開けた！」と表現した、という例である。日本語では瓶の蓋に話題の焦点があるとき、「あ、開けた！」と表現する。しかし、自動詞他動詞両用の動詞を用いる中国語母語話者にとって、「私が力をいれて、私の力で開けたのに、なぜ＜開けた＞という他動詞を使って悪いのか、蓋が自然に開いたのなら＜開いた＞でわかるけれど」と、感じられるのだ。

この誤用の背景には、日本語の自動詞表現が日本語教科書に反映されているとはいいいがたい現状がある。「開ける vs 開く」の説明が教科書の文法解説でどのようになされているか、という一例をSITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE（以下、SFJと略す）によって見ておく。

(1)「私はドアを開ける」(2)「ドアが開く」 In (1), the subject 私 controls the opening of the door, whereas in (2) the opening of the door is the result of someone else's action which cannot be controlled by the subject ドア. Many verbs have two related forms, of which one is a する type, the other a なる type verb. (Vol. 2. Notes. 71)

この SFJ 文法説明によれば、自動詞は動作主体 (subject) のコントロールが及ばない場合に選ばれ、学習者は感じるだろう。自分自身が瓶の蓋を開けたのであるならば、動作主体がコントロールして開けたと感じて、蓋が開いたときに「あ、開けた！」と、表現したくなる気持ちはわかる。では、どのような記述を加えておけばよいのか。

早津 (1987) は「有対自動詞 (他動詞と対応のセットになっている自動詞) は、働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を、有情物の存在とは無関係に、その非情物を主語にして叙述する動詞である」と述べている (102)。「自動詞 vs 他動詞」の対の動詞において、他動詞は動作主体の制御が可能であり、自動詞は制御のできない動作を表すという説明の次に、この早津の説明を加え、学習者に周知させなければならない。

さらに、中級上級の日本語学習者には、動作主体と対象補語 (目的語) との関係について説明する必要がある。「どうしてこのような表現をするのかわからない」と日本語学習者が言った文の例を紹介しておきたい。「引き出しを開けた。けれど、開かなかった」という表現がそのひとつである。「私は、引き出しを開けようとした。しかし、引き出しは開かなかった」という記述なら理解できる。しかし、「引き出しを開けた」という既実現の他動詞文に「開かない」という未実現の自動詞文が直接続くことについて、日本語学習者は理解にとまどうのである。

この文の受容には、二つのことがらを理解していることが必要になる。ひとつは日本語の動詞は、動詞の意味内容が完結していなくても表現できる、ということ。もうひとつは、動作主と動作対象が「所属関係にある」とみなされたとき、動作主から動作

対象へ加えられた動詞内容は、「行為の遂行」よりも「その場の事象の変化」を述べている、という日本語の再帰的他動詞文の特性である。

森田が紹介している日本語と印欧語系統の表現の違いを傍証として挙げておこう。森田は、言語学者泉邦寿の提出したフランス語と日本語の表現の差を紹介している。「彼は11月1日にカナダへ行った」という表現で、日本語母語話者は、「成田を飛び立っていった日が11月1日だ」と受け取る。しかし、フランス語で同じ表現をしたとき、フランス語母語話者は、カナダに到着した日が11月1日だと受け取る (森田 1998 91)。

すなわち「彼は11月1日にカナダへ行った」という表現において「行く」という動詞の意味内容が完結したことを表す印欧語に対して、日本語は動詞内容が完結していなくても「行った」と表現できる。これは、「切る」、「焼く」などの変化動詞の場合も同じである。「餅を焼いた」「釘を打った」という表現において、日本語の変化動詞は変化の完了を意味しない。

「引き出しを開けた。けれど、開かなかった」という文の構造は「(私が)引き出しを開けるという行為を行ったが、(引き出しは)開かなかった」という「他動詞文+逆接の接続詞+自動詞文」というものである。表現者が最終的に意図するところは、「引き出しに対して何らかの行為が加えられたが、引き出しが開くことはなかったという事態の推移」を述べており、日本語の他動詞文は「文の主体が他者に及ぼす行為」の描写を目的とするのではなく、自動詞と同じように、「事態の推移」を述べることを主な表現範囲としていると考えられる。「芋を焼いたが焼けなかった」も「力を込めて打ったが、釘は打てなかった。指を打ってしまった」も同じ。日本語の他動詞文は、変化動詞の変化が最終段階まで進むことを意図しない。「完了」を意味せずに「餅を焼いた」と表現でき、中味が生焼けだろうと半焼けだろうとかまわない。「しかし意図したとおりに焼き上げることができなかった」という場合、「餅を焼いた。しかしうまく焼けなかった」と、表現しうる。逆に「餅を焼こうとした。しかし焼けなかった」という文では、餅に対して行為者の意図はあつ

たものの、何らかの事情があって、「餅を焼く」という動作が行われなかったことを意味する。「焼く」という動詞内容がまったく開始されなかったことを意味するのである。

はじめておもちを焼きました。でもうまく焼けなかったのどどのようにしたらおいしそうなお餅が焼けるのか教えてください。(Yahoo「知恵袋」2008/11/29 10:01:58)

「釘を打っていて、思わず指を打った」というとき、行為者の主体性 *subjectivity* は、まだ残されているが、「餅を食べていて歯を欠いた」という発話では、行為主体から歯への積極的な働きかけはない。それでも日本語は「を格+他動詞」で表現する。

「引き出しを開けたけど開かなかった」という表現では、「誰が引き出しに対して行為を加えたのか」というような行為者に話題の焦点があるのではなく、「結局のところ、引き出しは開かなかった」という最終的な状態に話題の焦点がある。

本稿では、「行為主体がどのように行為作用を対象へ加えるのか」として主体の行動を叙述するよりも、「話し手聞き手のいる言語空間で、どのように事象が推移したのか」ということが、日本語表現の中心であるという観点から日本語叙述を見ていく。

森田(1998)が「外の世界を内なる己がいかに把握するか、外は客体的な外在世界と考えるのは論理の世界であり、日本語の発想ではない。日本語はあくまで己の内なる視点に投影した世界として主観的に把握する。自分を取り巻く周囲の「世界」対「己」の関係で、自らが受け止めた印象や感覚として対象を理解する」と述べている日本語への視点にたつて他動詞文の分析を試みる(131)。

言語タイポロジーでいう SOV 型の範疇に入ると見なされる日本語において、他動詞文について「主語が対象に作用を加えて変化させる」という「動作主体中心の表現」として見るより、「事態推移表現中心の述語」と考え、本論では、日本語の述語が表現の「場」を担い、述語(述部)を中心として表現が成立すると考えた上で、個々の文章表現をみていくことにする。

5. 再帰的他動詞文

英語では、動詞をめぐって主語と客語は対立している。主語は動詞内容を対象格(目的語)に加え、変化を引き起こす。

<主語>→<他動詞>→<対象>

日本語では、対象格は主体に包まれるものとして存在し、主体とは、対象が動詞内容の変化を表していく事象の中心にいる存在である。

<主体(対象)>←<他動詞>

英語の他動詞文は、行為主体が客体に変化を与えることを表現しているが、日本語の他動詞文は、自動詞の対極にあるものだけではなく、グラデーションをもって自動詞文から他動詞文まで連続的に存在する。

自動詞文>再帰的他動詞文>弱い他動性の他動詞文
>強い他動性の他動詞文

学習者は、文法解説書を参照するとき、どうしても母語の文法にひきずられた解釈をする。「他動詞」という文法用語を知れば、自分の母語の他動詞にひきつけて理解しようとするのは当然のことだ。しかし、日本語に表現された他動詞文は、幅が広く、形式上は他動詞であっても、自動詞文として扱うべき文も存在する。

「綱子は、餅で歯を欠いた」(向田邦子『阿修羅のごとく』)という他動詞の形をとる文を分析する。

「ヲ格+他動詞」の形をとり、形式上は他動詞である。しかし、「～を欠く」の主体「綱子」は、対象格の「歯」に対して、意志的に動作作用を加えた行為者ではなく、動作主体とは言えない。この文は、他動詞の形式を見せていても、「～ヲ格名詞+他動詞」のセットで自動詞相当になっており、事態の推移をあらわしている。綱子は、「歯が欠ける」という事象の推移を負っているにすぎない。なぜなら、この文の「歯」は綱子に所属するものだからである。

日本語の他動詞文は基本的に「ヲ格補語＝対象語（目的語）」をとる。ヲ格補語の名詞は「モノ名詞」がほとんどで、「ヒト名詞」は少ない。日本語の他動詞文では、事象の推移を主宰するものとしての「主体」が存在する。この点が、ヲ格名詞の変化移動を、主格が加える作用行為によって成し遂げていることを叙述する印欧諸語の他動詞文と基本的機能が異なっている。

「太郎は、床屋で髪を切った」という他動詞文で、太郎は「行為主体＝agent」ではなく、「事態の変化推移を所有する者・主宰する者」となっている。太郎は「太郎の髪が切られて、短くなったこと」という事象の推移を主体として負っている。

では、「次郎は洋裁室で布を切った」は、どうか。これとても、次郎がハサミを持った行為者でなくても、文は成立する。トップデザイナーの次郎が、仕事を指揮して、洋裁チームの一員に布を裁断させており、自分ではハサミを持っていないとしても、仕事の推移について全体の責任者として「洋裁室で布を切った」と、表現できる。次郎は、「洋裁室で布が切られた」という事象の推移を、負っている主体である。

従来、自動詞文は事態の推移を表現し、他動詞文は主語による行為作業を叙述すると文法書などに解説されてきた。筆者は、日本語においては、他動詞文もまた、自動詞文と同じく、「事態の推移」を表すことを主とするものと考え、他動詞の対象補語（目的語）は、動詞の補語成文として、動詞述語に含まれるものと考え、片山（2003）は、稲村（1995）を引用して以下のように述べている。

稲村（1995）は、主語と目的語が所属関係にある多数の再帰構文の意味分析から、「主語＋主語と所属関係を持つ目的語＋述語」という構造の再帰構文は「主語をめぐる出来事」を表し、その表現内容には「主宰者主語による使役的出来事」や「他の行為や外部の原因を受けた受け身的出来事」などがあることを指摘、「家を建てる」「注射をする」なども広く再帰構文に含めて提示している。（3）

「私は力をこめて瓶の蓋を開けた」という文が成立するとき、「瓶の蓋」は、すでに「私」の関係物／所属物として存在し、「私に所属するもの」と、主体に受け止められている。瓶の蓋が開いたとき、「あ、開けた」ではなく「あ、開いた」と表現するのは、「対象・目的物（ヲ格補語）＝瓶の蓋」に対して与えられた動作主体の力は、動作主体の支配下、影響下にある物への言及だからである。これは三人称動作主体であっても同じである。彼が力を込めて瓶の蓋を開けたのを見ていた人も「開けた！」とは言わない。「開いた！」と、事態の推移について感慨を述べる。発話者の視点の中心に瓶の蓋があり、「瓶の蓋」を話題の中心として述べるからである。「あ、彼が開けた！」というのは、「他の人が開けても開けなかったのに、彼だけが開けることができた」というような場合に限られ、有標的な表現となる。

部屋の中、グラスがテーブルの上に置いてある。部屋でハイハイをしていた赤ん坊がテーブルにぶつかってグラスが割れたとする。それを見た人が、グラスが赤ちゃんの所属物でないと感じていれば「あ、赤ちゃんがグラスを割っちゃった」と、表現する。ハイハイという赤ん坊のおぼつかない移動は、グラスに対してコントロールしうる動作ではないにもかかわらず、グラスの破壊という状態をもたらした。変化の結果に制御能力を持たない赤ん坊を動作主体として表現するのは、対象であるグラスへの動作コントロールの有無ではなく、「グラスが割れた」という事態の推移に関して、視点の中心物であるグラスは「赤ん坊の所属物ではない」と感じられ、動作主体とグラスが一体となって事態の変化を負うとは感じられないからである。

しかし、家の主人または客人がグラスを手にしてウィスキーを飲んでいたときグラスが下に落ちたのであれば、通常は「あ、お客（主人）がグラスを割っちゃった」とは言わない。故意にグラスを投げつけたというような場合でなければ、下に落ちたグラスを見た人は、「あ、グラスが割れちゃった」と言う。グラスに視点の焦点をあてて表現するほうが、無標的表現であり、動作主体を文の主体として表現するほうが有標的である。客が手に持っていたグラ

スは客に所属していると考えられるゆえ、「お客さんが手に持って飲んでいたグラスを手から落として割った」と再帰的表現によって表現した場合、「お客さんが固い餅を食べていて歯を欠いた」と表現した場合と同じく、「グラスが割れるという事態」の状態主体として存在しているのであって、「グラスが割れた」という事態への行為主体として表現しているのではない。この「お客さんが手をすべらせてグラスを割った」という他動詞文も、事態推移を表現しているという点で自動詞表現につながるものである。竹林 (2008) も、以下のように述べている。

訪問先の家の花瓶を落とした場合に、「あ、割れてしまった」と言えないのは、発話者が心の中では「割れてしまった」と思っている、「割れてしまった」と無標的に表現したのでは、事態の重大さ（いわば特殊的・非日常性）を表現することにならないからである。家の主人がその持ち物である花瓶を落とした際に、訪問者が何も言わない場合や「あっ」のような感嘆詞のみの場合であろうが、自動詞・他動詞のいずれかを使うかと言えば、「あ、割ってしまった」ではなく、「あ、割れてしまった」というのは、責任の所在が家の主人にあると表現するのを避けるという理由もあろうが、事態を無標的に表現するだけのことであるとも言える。(140-41)

筆者の主張する再帰的他動詞表現を通して考えるなら、花瓶が家の主人に所属していることがわかっていると、「ご主人の肘がぶつかって、花瓶を割ってしまった」と、他動詞文で表現したとしても、それは「ご主人」を「行為主体」として責任を追及し有標的に表現しているのではなく、「花瓶が割れたこと」という「事態の推移」の中心に「ご主人」がいる、という表現にすぎないと見なしうる。

いずれにせよ、竹林 (2008) が、「日本語の文表現の本質は、＜主部項目における、或る事象の現出＞を表す。＜主部項目における、或る事象の現出＞は、もっとも無標的なあり方で事態を把握・表現する傾向が強い「現出」型言語である。」(144) と述べていることは、稲村 (1995ab) が述べたことと矛

盾するものではない。

「彼はころんで骨を折った」は、彼が骨に対して「折る」という行為を加えたことを表現しているのではない。「彼」は「骨が折れた」という事態の推移の話題の中心者であって、他動詞文で表現したとしても、自動詞文の表現に相当する。「信長は安土城を建てた」というとき、「信長さんは大工ですか」という冗談が通用するのは、「家を建てる」という「ヲ格補語＋他動詞」の表現が、実際に動作主体（行為主体）の動作が行われたとして表現することも、「家が建つ」という自動詞的事態の変化を視点の中心的人物を主体として表現することも、どちらもできるからである。「安土城が建った」という事態推移全体の中心に存在しているのが信長であって、城に対して具体的な動作をしている必要はないと、日本語話者は知っているからである。文の主体から対象格（目的語）への具体的な他動性をもつかもたないかに関わりなく、「ヲ格補語＋他動詞」の形式の文で表現することが可能であることを示している。

日本語学習者に対し、次の点を日本語自動詞表現・他動詞表現の特徴として示したい。

- 1) 「日本語は、有対自動詞（他動詞と対応のセットになっている自動詞）は、働きかけによってひきおこしうる非情物の変化を、有情物の存在とは無関係に、その非情物を主語にして叙述する動詞である」（早津 1987）
- 2) 「ヲ格対象語（目的語）が、文の主体と関わりを持つ」と発話者（表現者）が意識しているとき、他動詞文は全体として「事態の推移」を表現し、文の主体が実際に行為者性（agentivity）を有していないに関わらない。「事象の視点中心者」「事象の主宰者」を主体として表現する他動詞文もある。
- 3) 「主部項目において或る事象が現出する」ということを表現する場合、もっとも無標的な表現は、発話者にとって「おのづから然る」表現となる。

6. おわりに

日本語が印欧語系統の語群と異なる表現をするとき、それをあたかも「日本語の劣った部分」と見なす立場は、まだまだ残っている。たとえば、名詞の

単複の表現において次のような言説がある。

英語では通例複数のもので（日本語では）単数になるものとして「スリッパ slippers」や「ウーマン・リブ women's lib」「パンティ panties」などがあります。日本語では数の概念があいまいなので省略してしまうのでしょうか。（小林 151）

「日本語が数の概念においてあいまいだ」というのは、英語や他の印欧語のように名詞を単数と複数に分けない言語である、というだけのことで、助数詞の数をみれば、「日本語は数の概念において実に細やかな区別を名詞に対して行っている」と見なすことができる。このような考え方でいけば、印欧語の名詞分類において「男性名詞・女性名詞」という分け方をしていることをもって、「日本語や英語は、男性と女性をまったく区別しない言語である。男女の差にあいまいだからだ」という言説も可能になる。言語には、それぞれの文化と思考が反映している。自他の区別においても、日本語には日本語の論理があるのだということを、日本語学習者は知らなければならない。

日本語が他動詞文ではなく、自動詞文による表現を指向するという点をもって、「日本語はスル言語ではなくナル言語であり、責任の所在をはっきりさせない言語である」というような見方をする論述は、「日本語と日本文化」論においてしばしば言及される。しかし、日本語他動詞文が「動作主体」が「他動詞」内容を「ヲ格補語」に行為として加えることを常に意味しない、ということ、また自動詞文のほうが無標的である、ということが言えるとして、それは「日本語が主体をはっきりさせずに行為の責任の所在をあきらかにしていない」ということにはならない。「行為者主語がない表現を多用するのは行為者の責任を明らかにしていない」というのは、日本語表現の論理を印欧語の文法によって解釈しようとする安易な日本語論なのではないだろうか。

日本語は日本語の論理によって表現がなされている。他動詞文も、日本語の論理のなかで表出された表現であり、自動詞及び再帰的他動詞文が「事態の

推移」を描くとしても、それが「自主的主体的な行動を文にあらわさない」とみなされることは、日本語にとって不本意なことである。

日本語は、述語の現出する事象を「事象の推移の中心にいるものの視点によって描き出す」ことを表現しようとする言語であり、「自動詞文を多用するゆえ行為者の責任を放棄した表現である」などの論は日本語の本質を理解していない言説と言えよう。

<参考文献一覧>

- 浅利誠（1981）『日本語と日本思想』藤原書店
池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
池上嘉彦（2000）『日本語論への招待』講談社
稲村すみ代（1995a）「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報第16号』
稲村すみ代（1995b）「現代日本語における再帰構文」『日本語の教育と研究（窪田富男教授退官記念論文集）』（専門教育出版）
奥田靖雄（1984）『ことばの研究・序説』むぎ書房
片山きよみ（2003）「他動詞の再帰的用法について」（熊本大学言語学研究室紀要）
<http://1118.let.kumamoto-u.ac.jp/ariake/05-03.pdf.html>
金谷武洋（2003）『日本文法の謎を解く』ちくま新書
小林忠夫（1999）『カタカナ語の正体』丸善ライブラリ
白川博之（2002）「記述的研究と日本語教育—語学的研究の必要性と可能性」『日本語文法2巻2号』
竹林一志（2004）『現代日本語における主部の本質と諸相』くろしお出版
竹林一志（2007b）『「を」「に」の謎を解く』笠間書房
竹林一志（2008）『日本語における文の原理』くろしお出版
筑波ランゲージグループ（1992）『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』凡人社
寺村秀夫（1982・1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』くろしお出版

- 橋本進吉（1946）『国語学概論』岩波書店
早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞
の意味的・統語的特徴」『言語学研究6号』京都
大学言語学研究会
三上章（1953）『現代語法序説—シンタクスの試み』
くろしお出版
三上章（1972）『続現代語法序説』くろしお出版
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館
書店
宮島達夫（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』
秀英出版
森田良行（1990）『日本語学と日本語教育』凡人社
森田良行（1998）『日本人の発想、日本語の表現』
中公新書
森田良行（2006）『話者の視点が作る日本語』ひつ
じ書房
本居春庭（1763 - 1828）『詞通路』『詞八衢』
山口明穂（1971）『国語の論理』東京大学出版会
渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房

Yahoo「知恵袋」

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1221026522)

(Received: December 31, 2008)

(Issued in internet Edition: February 8, 2009)